

## D. H. LAWRENCE: 小説に現われた女性(その2)

### The Rainbow を中心に\*

石 田 美 栄

#### I

「D. H. LAWRENCE: 小説に現われた女性(その1)」では、「生い立ちと Sons and Lovers を中心に」と題して、第1部は Lawrenceの生い立ちを主とした作者の自叙伝であり、第2部は青年期の性欲を中心にした作者の自己心理学であって、異状な母親の愛に歪められていた青年期の総決算を、Sons and Lovers を完成することによって成し遂げたことを述べた。Sons and Lovers の完成は、Frieda との恋愛・結婚を通して、The Rainbow, Women in Love などを書くことになった偉大な作家 Lawrence の誕生を意味し、また同時に息子としての Paul Morel は死んで、成年、一人の男としての Paul Morel の誕生を意味するのである。Harry T. Moore は “The writing of Sons and Lovers had a liberating effect upon Lawrence as man and writer, in that it enabled him to shake off some of the fixation of his past.”<sup>1</sup> といい、Mark Spilka は Sons and Lovers の最後の行りに次のような解釈を与えている。

Paul's death as a son implies his birth here as a man, and the potential birth of Lawrence himself as man and artist. It is a tenable theory, and from a biographical point of view, an important one.<sup>2</sup>

Sons and Lovers に現われた三人の女性は、Paul Morel の成長過程における必要物として存在し、Paul を養い育ててゆくために各々別々の役割を果たした。この点に関して、Kate Millet は Sexual Politics において明快な解釈をおこなっている。

The women in the book exist in Paul's orbit and cater to his needs: Clara to awake him sexually, Miriam to worship his talent in the role of disciple, and Mrs. Morel to provide always that enormous and expansive support, that dynamic motivation which can inspire the son of a coal miner to rise above the circumstances of his birth and become a great artist.<sup>3</sup>

Sons and Lovers の結末は、Paul が三人の女性から受けていた様々の支えをすべて振り切って、男として、成人として生れ変わって出発して行くのである。そこには Frieda との出会いがあって、これが Lawrence をしてそれまで係りのあった数人の女性と別れ、この自伝的小説を書くことによって自分の過去を静観・清算する勇気を与えたのである。そしてそれ以後、

小説論で述べている「人間にとって偉大な関係は男女の関係である」という主題に従って、両性関係の諸相を描き、分析して、その理想的状態を追い求めてゆくことになる。Sons and Lovers では男性の誕生を見たが、女性はここでは Paul が成人となるための手段、道具として扱われている観があり、両性一体となってその関係の理想的状態を追求してゆくには、それにふさわしい女性の誕生が必要となってくる。この女性の誕生を The Rainbow の中に見てゆきたい。

大山敏子は「女性と英文学」の中で、Lawrence について「20世紀の小説家の中で特にその扱った女性が非常に独自の重要性を持った作家」<sup>4</sup> と評し、Lawrence の小説を動かしている大きな力は女性で、「ロレンスの女性は彼の文学の本質を解く鍵であり、彼の文学を支えている神秘的な力である」<sup>5</sup>とも述べている。また性の問題を徹底的に論ずることによって女性の本質を見極めようとする人たちが、Lawrence に深い関心をよせており、Lawrence の文学に現われた女性を理解するのに大いに役立つ女性分析をおこなっている。

Sons and Lovers を完成し、Frieda との恋愛、結婚を通して、作家としても新しい時期に入った Lawrence は、多くの批評家たちが、彼の最も優れた作品とみなす Women in Love とその前編にあたる The Rainbow を書いている。しかもこれらの作品は、彼の経験に基づく様々な様相を一般化しようとした二大努力である。それでは Lawrence のその後の文学観に重要な影響を与えた女、Frieda について少々見てみたい。その当時 Lawrence の親しい友人であった Helen Corke は、Lawrence と Frieda の恋愛について、D. H. Lawrence: The Croydon Years の中で次のように著している。

It was at this crucial moment of his life that Lawrence met a woman fully equipped by temperament and circumstance to release him from the maternal bondage. Frieda was the sun of a new day, whose beams dispelled the dark atmosphere of his youth. . . . Soon he was in Europe with Frieda, walking in her light and warmth, the compulsions of the old home sunken below his horizon.<sup>6</sup>

更に、Frieda 自身の書いた Not I, But the Wind や Lawrence の詩集 Look! We Have Come Through! の中に、Lawrence と Frieda の熱情的かつ永遠の格闘であった愛と生活を窺い知ることができる。二つの強い自我のおっかり合いであったのだ。強い自我の持ち主であった Frieda は、絶えず Lawrence に自分の必要性を認めさせようとした。ポーヴォワールは「第二の性」の中で、Frieda の Lawrence 文学への影響についてメーベル・ドッジの証言を用いて、「彼の知的優越を否定することができないので、彼女は性的な価値だけが重要さをもつという自分自身の世界観を彼におしつけようとした。」<sup>7</sup> と言っている。生れつき病弱で胸の病いに悩まされ続けた Lawrence には、既に三人の子供の母親であり豊満な肉体を持つドイツ貴族出身の Frieda は、絶えず恐怖の対象であり、興味の対象でもあった。こうした Frieda との恋愛体験を経て、Lawrence はそれまでとは異った両性関係の諸相に気がつき、それを分析し、理想状態を探ってゆこうとした。こうして書かれた The Rainbow の中で、Lawrence はいったいどんな女性の誕生を試みたのであろうか。

註

※本論は「D. H. Lawrence: The Rainbow に現われた女性」と題して、1975年日本文

学会中国・四国支部大会で発表したものに修正加筆したものである。

- 1 T. J. Hoffman and H. T. Moore, comps., Achievement of D. H. Lawrence (Norman: University of Oklahoma Press, 1953), p. 145.
- 2 The Love Ethic of D. H. Lawrence (Bloomington: Indiana University Press, 1955), p. 39.
- 3 New York: Avon Books, 1971, p. 327.
- 4 篠崎書林, 1961, p. 242.
- 5 Ibid., pp. 265-6.
- 6 Austen: University of Texas, 1965, p. 34.
- 7 生島遼一訳, 「女はどう生きるか」新潮社, 1953, p. 89.

## II

The Rainbow は Brangwen 家の三代記で, Tom Brangwen の代から物語は始まる。しかし Sons and Lovers では Paul Morel が中心人物で, 三人の女性はいずれも Paul の成長に奉仕する必要物として扱われているのに較べて, The Rainbow では Lydia, Anna, Ursula の三人の女性へと中心が移りつつ物語が展開されてゆく。Tom Brangwen の世界に Lensky 母娘が登場すると, Tom・Lydia の関係にも増して Tom・Anna, 養父・娘の関係が浮び上り, やがて Anna の世界へと移行し, Anna の相手として Will Brangwen が登場する。続いて Will・Ursula, 父娘のつながりに力が入り, 物語の中心は完全に Ursula へと移ってゆき, Anton Skrebensky は Ursula のために登場し, 消されてゆく。

The Rainbow は Brangwen 家にまつわる女性解放の三代記, すなわち主要人物 Ursula は三代に渡る Brangwen 家の女の願望達成である。先代二人の女 Lydia と Anna は母親とか妻という伝統的な女の姿として描きだされ, 女のそれまでの歴史として集約され, 全体として新しい女性誕生のための成長過程となっている。Kate Millet は Lawrence が Ursula の中に新しい女性を生み出そうとしたことを次のように評している。

In The Rainbow, Lawrence dealt with the new woman head on in the character of Ursula Brangwen. Ursula Brangwen is to fulfill the ambitions of her ancestors—for from the first Brangwens, the men had looked back to the fields, the fertile earth, and the women looked out toward learning and the cities. Ursula's mother Anna had been “straining her eyes to something beyond” and “from her Pisgah mount” she could glimpse “a faint gleaming horizon, a long way off,” a promised land she never arrived in, falling into a mindless slattern instead. But Ursula does reach the promised land of the Brangwen women; transcending their confining traditional world she goes out to work and then to the university.<sup>1</sup>

それではこれから, 三代に渡る女性解放の歴史を, ここに示された三組の両性関係を分析しつつ論じてみたい。

先ず冒頭に、Brangwen 一族の年代記を思わせるごとく、一族が親しんできた Marsh Farm が描写され、ここで男達が大地、自然との生命の交流、血の交歓に満足感を持って生活しているのに反し、その女達がそれとは違った生活を夢見ていることが “a question of knowledge”, “education and experience”, “freedom to move” といった言葉で述べられる。一代目の Tom Brangwen が持っている女性のイメージは “the myth of the eternal feminine, the earth mother” である。

The men placed in her hands their own conscience, they said to her “Be my conscience-keeper, be the angel at the doorway guarding my outgoing and my incoming.” And the woman fulfilled her trust, the man rested implicitly in her, receiving her praise or her blame with pleasure or with anger, rebelling and storming, but never for a moment really escaping in their own souls from her prerogative. They depended on her for their stability.<sup>2</sup>

Tom は娘を連れだポーランド人の寡婦 Lydia Lensky と恋愛し、結婚生活に入るが、Tom は農夫であり、Lydia は亡命ポーランド人の医者寡婦で知識階級の出であることから、性格上の相違が生じてくる。“She was passive, dark, always in shadow” である Lydia は、次第に暗い自我をもたげて、二つの自我はぶつかり合うようになる。Tom は Lydia を時には憎み、激怒し、あるいは恐れるようになる。そして子を産む女の優位は出産の場面を通して強く表現される。farm wife, mother としての女の姿が強く描れ、日常生活の中での女性支配が成り立っているように見える。Sons and Lovers における Mrs. Morel と Paul の母と息子の関係とは対照的に、The Rainbow では、夫の妻への不満が連れ子 Anna への愛情に変化して father-daughter の関係となる。しかしこの father-daughter の関係は、The Rainbow ではあまり深く追求されず、物語の中心は Anna、すなわち女性を描き進む方向に移されてゆく。

このように見てくると、表面的には Lydia が Tom を圧倒しているかのように思われるが、そうではない。Lydia は “the maternal figures of the past” の女性に止め、伝統的、過去の女性の中に、両性関係における女の本質を分析しようとしているのである。最初に登場したこの一組の夫婦関係では、patriarch まで崩れているわけではなく、Lydia の強さは “passive, dark”, “in shadow” であって “the earth mother” ということに過ぎない。Lydia が知的な外国人であることから、素朴な農夫 Tom にとって、“otherness”, “strangeness” といった一種の崇拜、憧れの対象であることからして、Lawrence は Lydia と Tom の両性関係を完全なもの、理想的なものとは考えていないが、中橋一夫が言うように「現代の病患が両性関係を蝕む以前の一種の均衡状態をみせているようにおもわれる。」<sup>3</sup> すなわち二つの自我の闘いのうちにも、互によくわかり合えない、知的理解には達しないうちにも、肉体的、感覚的には consummation の状態に達し、Kate Millet がいうように、Lawrence はむしろこの両性関係を賞賛している “because these earlier persons still live in a simple primitive ‘blood knowledge’ which contrasts very favorably to the present: the three generations are a devolution from the golden age to the leaden industrial morass of today.”<sup>4</sup>

このような Tom と Lydia の間の闘争と一種の理想境が、CHAPTER IV の終りに克明に描き出されている。夜になって Tom は Anna と遊んでやった後、いつもながらに妻 Lydia

と二人だけで座り合やすことになる。妻は縫い物をし、夫は煙草をふかすが、夫は妻の “quiet figure”, “quiet, dark head”, “she was in her own world, quiet, secure, unnoticed, unnoticing” に耐えられなくなって、出て行こうとする。

“Why do you go away so often?” she said.

“But you don’t want me,” he replied.

She was silent for a while.

“You do not want to be with me any more,” she said.

It startled him. How did she know this truth? He thought it was his secret.

(p. 87)

というような会話が始まり、いわゆる妻は「私じゃもの足りなくて、他の女が欲しいのでしょう」というようなことになるが、突然夫は “utterly certain, satisfied, absolute, excluding him” に思っていた妻が、実は “lonely, isolated, unsure” なのだわかる。更に会話は続いて、夫は体内に力を感じ、妻はやさしい気持ちになり、やがて二人の自我の対立は次第に解けて、互いに近づき、ある consummation に達する。それは結婚二年を経て二人が得た “the entry into another circle of existence”, “the baptism to another life”, “the complete confirmation” であって、 “They went gladly and forgetful. Every thing was lost and everything was found.” である。しかし夫は妻をよりよく理解するようになったわけではない。 “But he knew her, he knew her meaning, without understanding.” 従って昼間は以前と変わらず、夫は農場で働き、妻は子供の世話をし、お互いのことは忘れてる。

Only when she touched him, he knew her instantly, that she was with him, near him, that she was the gateway and the way out, that she was beyond, and that he was travelling in her through the beyond. Whither?—What does it matter? He responded always. When she called, he answered, when he asked, her response came at once, or at length. (p. 92)

次に登場する男女は、Tom の甥 Will Brangwen と Lydia の連れ子 Anna Lensky である。Will は Anna に征服され、支配される男性、Anna という女性を描くために必要な相手として登場するのであって、物語は Anna を中心にして運んでゆく。外国人の女で Marsh Farm に新風を吹き込むものとして入って来た母親の Lydia を次の代へと引き継ぐべく、Anna は小供の時より強い自我の所有者として成長してゆく。 “Anna had a new nerve, a new independence. Suddenly she began to act independently of her parents, to live beyond them.” (p. 110) Anna と Will の結婚式に Tom は “What I say is, that when a man’s soul and a woman’s soul unites together—that makes an Angel—” (p. 135) と理想境を叫んでいるのに対して、この二人の関係は、女性の男性征服、支配、そして女の女性依存に我慢できず、二人は激しく相争う。このような一方による他方の征服という状態に両性関係の理想、均衡はあり得ない。CHAPTER VI ANNA VICTRIX はこの両性関係の鮮やかな描写である。Anna は密月から大胆に Will を圧倒しようとする。これに対して、最初のうち Will は自我を保持しようと、古くからの patriarch を主張して対抗する。しかし

Anna は涙や肉体の武器を用いても、Will を自分の支配下に置こうとする。

When they came to themselves, the night was very dark. Two hours had gone by. They lay still and warm and weak, like the new-born, together. And there was a silence almost of the unborn. Only his heart was weeping happily, after the pain. He did not understand, he had yielded, given way. There was no understanding. There could be only acquiescence and submission, and tremulous wonder of consummation. (p.153)

Will と Anna の場合は、このような官能的な consummation が、Tom と Lydia の関係におけるように、性格の相異を越えて両者の均衡状態を保つことにはならない。「Lawrence が明らかにしようとしたことは、Anna と will の性格でも、二人の間の愛情でもない、肉において結合し、ことばにおいて対立する男女が、一緒に暮そうとし、結局はその中に、ある種の救済を見いだそうと努力することなのである。」<sup>5</sup> と村岡勇はいうが、Anna と Will の間では、そのような状態は無理である。Anna は Lydia のように passive ではなく、Will もまた Tom とは異り、ある神秘の世界を感じて生きている。二人は性格の相違を埋めることはできず、Anna は妻は母なる大地であるという自信で、Will の世界にずかずかと踏みこみ、征服してしまおうとする。妊娠した Anna が鏡の前で全裸の姿で踊りまわる場面は、女の自我心の誇示を最も著しく表わしたものである。結局 Anna は “the eternal mother”, “the earth mother” の強い主張によって、夫に patriarch を締めさせ、精神的優越も精神的支配もなくさせてしまう。

He would insist no more, he would force her no more. He would force himself upon her no more. He would let go, relax, lapse, and what would be, should be.

Yet he wanted her still, he always, always wanted her. In his soul, he was desolate as a child, he was so helpless. Like a child on its mother, he depended on her for his living. He knew it, and he knew he could hardly help it. (p.186)

There was a stillness, a wanness between them. Half at least of the battle was over. Sometimes she wept as she went about, her heart was very heavy. But the child was always warm in her womb. (p.187)

Ursulaを生む場面は、再び印象的に妻の母なる大地の勝利を表わしている。“She knew she was winning, winning, she was always winning, with each onset of pain she was nearer to victory.” (p.189) そして生まれた Ursula を見て ‘Anna Victrix’ という。このようにして、Anna は次々に9人もの子供を生んでゆき、“She felt like the earth, the mother of everything.” Will は熱心に教会の仕事をするこゝでもって、わずかに自我の世界を支えているが、もはや空虚な存在にすぎない。

In the house, he served his wife and the little matriarchy. She loved him

because he was the father of the children. And she always had a physical passion for him. So he gave up trying to have the spiritual superiority and control, or even her respect for his conscious or public life. He lived simply by her physical love for him. And he served the little matriarchy, nursing the child and helping with the housework, indifferent any more of his own dignity and importance. But his abandoning of claims, his living isolated upon his own interest, made him seem unreal, unimportant. (p.205)

John Middleton Murry は “Will Brangwen, so to speak, is a Lawrence who has given up the effort—the effort to make the spirit and the flesh dwell together in harmony.”<sup>6</sup> という。そしてこの努力は次代の Ursula に引き継がれるべく、物語の中心は Ursula へと移つされてゆく。

Ursula は The Rainbow の第三番目、最後の両性関係を展開するために登場するのであるが、この小説の中心人物であり、Anna が Ursula を出産する時点から、Anna の母性の勝利を乗り越えるかのように印象的に登場する。Ursula は子供の時から、勝気で、頭がよく、一風変わっていて、到底今までの Marsh Farm の女たちのように、じっと Marsh Farm に留って満足するような女ではなさそうである。“Ursula, attentive and keen abroad, at home was reluctant, uneasy, unwilling to be herself, or unable.” (p.268) 成長するにつれて “she must go somewhere, she must become something” と考え、明らかに Marsh Farm のそれまでの伝統的な女の殻から抜け出て、新しい方向を探ることを表わしている。更に Ursula は父親 Will から受け継いだ宗教的感情をはぐくみ、それが恋愛、愛情、官能と交錯するようになる。

She leapt with sensuous yearning to Christ. If she could go to him really, and lay her head on his breast, to have comfort, to be made much of, caressed like a child!

All the time she walked in a confused heat of religious yearning. She wanted Jesus to love her deliciously, to take her sensuous offering, to give her sensuous response. For weeks she went in a muse of enjoyment. (p.285)

このような時期に Ursula は Anton Skrebensky と出会う。Ursula は知的で、生命力に燃え、早熟で、一段と自我の強い女である。Anton はポーランドから帰化した貴族の出で、陸軍技師である。美しい容姿で自信のある落ち着いた態度の Anton に Ursula は心を捉えられてしまう。労働者階級出であるが、知的で、新しい時代の女の生き方を夢見ている Ursula と貴族出の陸軍技師 Anton という、性格の相違の非常に大きい、各々に強い自我を有する男女の恋愛を通じて、Lawrence は両性関係の理想的状態を分析、追求してゆく。すなわち中橋一夫のいう「男女双方の自我が無限に拡大しつつ、星と星との間のように均衡を保つことが恋愛の理想であった。」<sup>7</sup> ということである。

Anton と激しく触れ合う時、Ursula の宗教的感情と交錯する愛情・官能の世界は “the moon” で象徴され、“She wanted the moon to fill in to her, wanted more, more

communion with the moon, consummation. (p.317) Anton とて強い自我の持ち主, Ursula を自分のものにしようと迫り, Ursula も Anton が自分を圧倒してくれることを望む。しかし宗教的感情と交錯する愛情・官能の世界に恍惚となる Ursula に, Anton はついてゆけず, Ursula にとって Anton は “nothingness” となってしまう。

And her soul crystallized with triumph, and his soul was dissolved with agony and annihilation. So she held him there, the victim, consumed, annihilated. She had triumphed: he was not any more.

. . . where was she? What was this nothingness she felt? The nothingness was Skrebensky. (p.320)

Ursula は再び “her ordinary, warm self” に戻るが, “there was no core of him”。Anton は Ursula の強い自我意識の前に, 自分の自我が圧迫されるのを感じ, 機にふれて恐怖さえ感じるようになる。南阿戦争によって, Anton と別れることになった Ursula は, 生命を失ったように感ずる。Anton と別れている間に Ursula は Brangwen 家の新しい女の道を進んでゆく。子供のために生き, それで “womanhood” を満たしている母親 Anna を尻目に, “Ursula would try to insist, in her home, on the right of women to take equal place with men in the field of action and work.” (p.353) そしてまた Ursula は経済的に独立すること, 選択の自由を獲得する方法を考える。CHAPTER VIII, IX のタイトル (THE MAN'S WORLD, THE WIDENING CIRCLE) が示すごとく, Ursula は助教師となり, それは新しい女の意識を持たせることである。

She had a standing ground now apart from her parents. She was something else besides the mere daughter of William and Anna Brangwen. She was independent. She earned her own living. She was an important member of the working community. (p.390)

She had another self, another responsibility. She was no longer Ursula Brangwen. She was also Standard Five teacher in St Philip's School. And it was a case now of being Standard Five teacher, and nothing else. (p.390)

この後, 独立した人間として生きようとする女のなめなければならない苦闘が描れ, “life” や “ideas”, “love” や “marriage” そして “the liberty of woman” について友人と論じ, 考え成長してゆく。

Anton との激しい恋愛の後, 六年の別離の間に, The Rainbow の中での新しい女性としての道を追いかめ, 成長してきた Ursula は, Anton との再会を “She wanted to run to meet Skrebensky—the new life, the reality.” (p.442) と待つ。二人の間の恋の炎は再び燃えあがるが, やがてまた Anton は Ursula の求めているものに不安を感じる。“. . . he had a cold feeling of death; not afraid of any other man, but of her. She seemed to leave him. She followed after something that was not him. She did not want him.” (p.456) この不安に対して Anton は結婚してしまうことを考える “All he wanted now was to

marry her, to de sure of her.” (p.458) しかし Ursula はこんな社会の慣習で二人の関係をごまかすことに我慢できない。二人の激しい恋と共に、二つの強い自我がぶつかり合って、Anton の Ursula への恐怖は募る。

She owned his body and enjoyed it with all tho delight and carelessness of a possessor. But he had become gradually afraid of her body. He wanted her endlessly. But there had come a tension into his desire, a constraint which prevented his enjoying the delicious approach and the lovable close of the endless embrace. He was afraid. His will was always tense, fixed.  
(p.460)

Anton は、Ursula が教員資格を取得する最後の試験に失敗すればよい、そうすればもっと自分のことを喜ぶであろうと秘に思うようになる。結局 Ursula は失敗するのであるが、Anton は Mrs. Skrebensky になれば the B. A. など意味がないという。Anton はなんとか Ursula の強い自我を征服しようとするが、結局 Anton の敗北に終わってしまう。

And he knew he could never touch her again. His will was broken, he was seared, but he clung to the life of his body.

“Well, what have I done?” he asked, in a rather querulous voice.

“I don’t know,” she said, in the same dull, feelingless voice. “It is finished. It has been a failure.”

He was silent. The words still burned his bowels.

“Is it my fault?” he said, looking up at length, challenging the last stroke.

“You couldn’t—” she began. But she broke down.

He turned away, afraid to hear more. She began to gather her bag, her handkerchief, her umbrella. She must be gone now. He was waiting for her to be gone. (pp.481-2)

中橋一夫は Anton と Ursula の関係について「ここでもロレンスは他が一方を征服するのではなく、互いに自己の自我を消滅させるのでもなく、強い自我の対立と闘争の上に真の恋愛関係は成立すると考えているらしいことが判る。」<sup>8</sup> と述べている。Anton は Ursula の相手を果せるだけの強い自我の持ち主ではなかったのだ。彼は Ursula との破局の後すぐ、逃げるように他の女と結婚してインドへ去ってしまう。まだ Anton が結婚したことを知らない Ursula にとって、妊娠したのではないかと考え始めたことは、彼女の求めてきた生き方をもう一度根底からゆさぶってみるものであった。

What did the self, the form of life matter? Only the living from day to day mattered, the beloved existence in the body, rich, peaceful, complete, with no beyond, no further trouble, no further complication. She had been wrong,

she had been arrogant and wicked, wanting that other thing, that fantastic freedom, that illusory, conceited fulfilment which she had imagined she could not have with Skrebensky. Who was she to be wanting some fantastic fulfilment in her life? Was it not enough that she had her man, her children, her place of shelter under the sun? Was it not enough for her, as it had been enough for her mother? She would marry and love her husband and fill her place simply. That was the ideal.

Suddenly she saw her mother in a just and true light. Her mother was simple and radically true. She had taken the life that was given. She had not, in her arrogant conceit, insisted on creating life to fit herself. Her mother was right, profoundly right, and she herself had been false, trashy, conceited.

A great mood of humility came over her, and in this humility a bonded sort of peace. She gave her limbs to the bondage, she loved the bondage, she called it peace. In this state she sat down to write to Skrebensky.

(pp. 484-5)

Ursula は Anton に詫び, “a dutiful wife” になることを誓って手紙を出すことで, 自分の心を “This was her true self, for ever.” と決定づけようとする。あたかも Sons and Lovers において, 母親の死後 Paul の自我は完全に解体して, 過去のあらゆる愛を断ち切って, 新しい成人, 男が生まれたごとく, Ursula の自我もここでいったん完全に解体をみる。Ursula は雨の中で激しく動きまわる馬の群に囲まれた時, 再び新しい生命の炎を感じ始め, その後の病気, すなわち甦るために過去を切り捨てる苦痛を通して, 最後に自分を Anton に結びつけていたものは “the child” なぜ自分だけの子供であってはいけないのか, あるいは子供は生まれないかもしれない, もし生まれても……と考える。そんな時 Anton が結婚したことを知らせてきて, Ursula が大空に掛る虹を見ることは, Ursula が過去を振り切って, 新しく理想の境地を求めてゆく希望を持つことを意味する。それは, 一個の独立した人間としての女性としてである。母親としてあるいは妻として, 男や夫に結びついた女ではない。より解放された, 強い自我の女が, それにふさわしい男と共に, 理想の世界, 生き方を求めて出発するのである。

註

1 Sexual Politics, p. 343.

2 D. H. Lawrence, The Rainbow (London: Heinemann, 1971), p. 13.

作品からの引用はすべて上記のもので, 以下引用の後にページ数のみ示す。

3 「D. H. Lawrence」研究社. 1965, p. 69.

4 op. cit., p. 342.

5 「D. H. ロレンス」研究社. 1966, p. 46.

6 Son of Woman: The Study of D. H. Lawrence (London: Cape, 1931), p. 81.

7 op. cit., p. 73.

8 Ibid., p. 73.

### III

第一に登場した Tom と Lydia の両性関係の中で、Lydia は外国人、知識階級の出ということから、Marsh Farm で代々続いてきた Brangwen 家の女たちの歴史に新風を吹き込む手始めであるが、Lawrence はまだ伝統的な女性のイメージで描いている。強い自我はあっても、積極的な行動はとらないで、頼れる母性 “the earth mother”, “the maternal figure” にとどまる。第二番目の Will と Anna の関係では母親 Lydia が Anna に “Between two people, the love itself is the important thing, and that neither you nor him. It is a third thing you must create. You mustn't expect it to be just your way.” (p.172) と助言しているごとく、子供において一つになり、それを生み育てる母親である妻としての女性を強調する。九人の子供を生み育て、夫を圧倒してしまう強い女を描いているが、社会的に独立した一個の人間などという観念は全くなく、依然として伝統的タイプの女性の域を脱してはいない。これら二人の女、Lydia・Anna によって伝統的なタイプの女性の中に女の本質の集約をおこなうと共に、それを引き継ぎながら、両性関係の理想的境地を実現するために必要な女性の誕生を、Ursula によって成し遂げたのである。先にあげた Lydia が Anna を諭す場面と並んで、CHAPTER IX THE MARSH AND THE FLOOD において、Tom の死に際して、祖母 Lydia と Ursula の間に交わされる会話の中に、Brangwen 家の女たちに新風と女の成長をもたらす切っ掛けとなった Lydia の隠された、あるいは無意識の願望が、Anna を経て Ursula に受け継がれていったことを知ることができる。Tom が洪水によって溺死したことは、それまでの感覚的、肉体的な生活の終りを意味し、Ursula との会話における Lydia の二人の夫への回想は、伝統的な女の集約をして、過去のタイプの女性に終止符を打ち、長年密かに培われていた女の願望として、新しい生き方へ向って、Ursula をして出発させることである。

She loved both her husbands. To one she had been a naked little girl-bride, running to serve him. The other she loved out of fulfilment, because he was good and had given her being, because he had served her honourably, and become her man, one with her.

She was established in this stretch of life, she had come to herself. During her first marriage, she had not existed, except through him, he was the substance and she the shadow running at his feet. She was very glad she had come to her own self. She was grateful to Brangwen. She reached out to him in gratitude, into death. (pp.258-9)

そして Lydia は孫娘の Ursula に言う。

“Yes, some man will love you, child, because it's your nature. And I hope it will be somebody who will love you for what you are, and not for what he wants of you. But we have a right to what we want.” (p.260)

Ursula は Lawrence の意図する、新しく生まれ変わる女となるべく、子供の時から “must

become something” と考え、成長するにつれて、恋愛、愛情、官能に、或る vision、宗教的感情を懐くようになる。やがて経済的に独立して、一人の個人として社会に生きてゆくことを考え、恋愛や結婚を通して男や子供に支配されたり奉仕するのではなく、一人の人間として独立し、自由を求める、強い自我の女として、新しい生き方、両性関係を追求してゆくべく、生まれかわる。The Rainbow は、最後の場面の虹で表わされる何か漠然とした希望で終わっている。“her heart anguished with hope” や最後の文章は “She saw in the rainbow the earth’s new architecture, the old, brittle corruption of houses and factories swept away, the world built up in a living fabric of Truth, fitting to the over-arching heaven.” であることから、過去を捨てて、新しく生まれた女 Ursula が、新しい両性関係、それは妥協よりもむしろ、自我の対立、両性の対立・闘争の中に求められるものであって、恋愛、結婚の場面で展開されてゆくので、Ursula にふさわしいだけの強い自我を持つ男との出合いを望むことで終わっている。

At the end of Sons and Lovers a man is born; at the end of The Rainbow, a woman; and in Women in Love a man and a woman meet and marry. Here is a simple formula, too simple perhaps to account for the complex structures of the novels at hand, yet suitable enough for the conscious attempt, on Lawrence’s part, to work out the conditions of manhood, womanhood and marriage, as he experienced or understood them in his life.<sup>1</sup>

Lawrence の生んだ女 Ursula は、経済的、社会的独立を目指し、母性に束縛されてしまわない、独立した一人の人間である、といかにも解放された女性のごとく響くのであるが XIII THE MAN’S WORLD における Maggie との議論に見られるごとく、よくはわからない、感覚的、本能的な人間の魂の解放といったようなものであって、“suffragette” などには積極的な関心を示さないところに、Lawrence の女性解放の限界、あるいは特徴がみられる。この傾向は、Women in Love ではより明確になり、その後の作品に出てくる両性関係においては、増々濃厚かつ神秘的で奇妙な男性優位の主張へと、両性関係の闘争が展開されるようになる。Kate Millet はこの点について実に面白い見解を与えている。

If Ursula has all the same mysterious powers of the female which gave Lydia and Anna such stature, the control of life and the ability to give birth which he finds so impressive, as well as the capacity to live in “the man’s world” (as Lawrence calls the chapter in which she earns her living) to succeed and achieve in it, then, Lawrence seems to feel, there is very little left anywhere for the male.<sup>2</sup>

Ursula に関しては、試験に失敗させ、妊娠の不安にかられた時、いったん百八十度転換を演じさせるが、結局は古い世界は洪水に消え、新しく出発せざるを得ないのである。虹によって象徴された希望、新しい世界とは、その答えは、次の大作 Women in Love で出される。Millet が指摘しているごとく、女性解放の年代記とも思われた The Rainbow も、そこで生まれた新しい女性 Ursula が、Sons and Lovers において誕生し、Women in Love では

Rupert Birkin (すなわち Lawrence 自身を表わしている) として出現する男と出会うにいたって、はっきりと後退の色を見せる。従って Women in Love に現われる三人の女性, Hermione, Gudrun そして Ursula を研究してゆくことは, The Rainbow に対する回答として, また Lawrence の最大の課題である, 両性関係の理想的境地追求と共に, 両性の本質解明として興味深いものであろう。

註

- 1 Mark Spilka, op. cit., p.121.
- 2 Sexual Politics, p.344.

#### 参 考 文 献

- Corke, Helen. D. H. Lawrence: The Croydon Years. Austen: University of Texas Press, 1965.
- Hoffman, T. J. and Moore, H. T. comp. Achievement of D. H. Lawrence. Norman: University of Oklahoma Press, 1953.
- Lawrence, Frieda. Not I, But the Wind. New York: Viking Press, 1934.
- Leavis, F. R. D. H. Lawrence, Novelist. New York: Knopf, 1955.
- Millet, Kate. Sexual Politics. New York: Avon Books, 1971.
- Moore, H. T. Intelligent Heart: The Story of D. H. Lawrence. New York: Farrar, Straus and Young, 1954.
- Murry, John Middleton. Son of Woman; The Study of D. H. Lawrence. London: Cape, 1931.
- Spilka, Mark. The Love Ethic of D. H. Lawrence. Bloomington: Indiana University Press, 1955.
- 中橋一夫 「D. H. Lawrence」 研究社. 1965。
- ポーヴォワール. 生島遼一訳 「第二の性—女はどう生きるのか」 新潮社. 1953。
- 村岡 潔 「D. H. ロレンス」 研究社. 1966。